第　40　号

県中教研 道徳部会だより

発 行 日　令和7年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　恒田　浩史
題　　字　金山　泰仁　先生

「本気になれる道徳授業」のために

指導主事　三國　大輔

「生徒と教師が本気になれる道徳授業を」。道徳の教科化が始まる時期に出会った言葉です。「本気になれる道徳授業」の実現のために、三つの明確な指導の意図をもつことが大切です。一つ目は道徳的価値について、教師がねらいや指導内容についての捉え方を明確にすること、二つ目は生徒の実態について、ねらいや指導内容に関連する学習状況や実態を明確にすること、三つ目は教材の活用について、その特質や具体的な活用方法を明確にすることです。

心に残った授業を、授業者の意図について振り返りながら紹介します。内容項目はC「勤労」、職業選択に関する様々な立場からの意見を基に、勤労の尊さや意義を理解するとともに、将来の生き方についての考えを深め、生きがいのある人生を実現しようとする態度を育てることがねらいでした。導入では学習専用端末を活用し、将来の生き方について不安や課題を抱えた生徒が意見を表明しやすいようにしていました。また、複数の投書から構成された教材に対し、特定の考えに安易に傾くことなく、多様な見方や考え方に触れることができるよう留意していました。

授業者は、進路の選択が迫られる中、自分の意思を強くもつ生徒が少ないという状況を踏まえ、教材を通じて、自分らしく生きることについて本気で考えてほしいと願い、ICTの活用や話し合う場の設定という工夫をされたのです。だからこそ、生徒は道徳的価値を自分との関わりで捉え、真剣に考えたのだと思います。

生徒の実態を適切に見取り、教材の特質等を踏まえ、道徳的価値について主体的に考えることができる効果的な学習を設定することが求められています。そして、学んだ道徳的価値に照らして、これまでの自分の生活を振り返り、自らのよさや課題を把握できる授業が展開されることを願っています。

（西部教育事務所）

「考え、議論する道徳」に向けて

県部長　恒田　浩史

令和６年度から、内容項目「C　主として集団や社会との関わりに関すること」を中心として研究を推進し、今年度は「『考え、議論する道徳』に向けた発問の工夫」を副題に研究を進めました。第68回研究大会では、東部大会を富山市立楡原中学校、西部大会を高岡市立志貴野中学校で開催しました。

楡原中学校は小規模校であり、生徒の人間関係が固定化され、多様な意見が出にくい難しい状況の中、精力的に研修を進めてくださいました。１学年の公開授業ではICTが効果的に活用されており、２学年ではペア活動を取り入れるなど、生徒の考えを引き出す工夫がみられました。

志貴野中学校は、全学年での授業公開を学校側から提案してくださり、学校を挙げて道徳科の授業づくりに取り組んでくださいました。発問の精選、授業者の効果的な問い返し、そして２色のカードを活用した活発な話合い等、工夫された３授業が提案されました。

東西研究大会の各授業では、吟味された発問により生徒の思考が促され、生徒が活発に発言する姿が多く見られました。また、生徒の発言に対する適切な問い返しによって、問題となっていることや考えるべきことが明らかになり、考えの深まりにつながりました。今年度研究大会の実践から「『考え、議論する道徳』に向けた発問の工夫」について大きな成果を得ることができました。

令和７年度の県中教研道徳部会は「『考え、議論する道徳』に向けた場の工夫」を副題として研究を進めます。どの場面で『議論』するのか明確にした授業構想や、活発に話し合うための学習形態の工夫等、「場の工夫」にスポットを当てた授業改善に取り組みます。さらに、今年度の研究大会でも今後の課題として挙げられた「発言した生徒と教師のやり取りから、どのように学級全体に議論を広げるか」についても、引き続き実践的研究を進めていきたいと考えています。

(富・上滝中)

第68回 研究大会報告

東 部 地 区　　富山市立楡原中学校

東部地区大会では、富山市立楡原中学校を会場に授業提案が行われた。

〈第１学年〉　東　　竜也　教諭

主題　心に郷土を刻もう

（内容項目　Ｃ　郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度）

教材　「郷土を掘る」

（出典：東京書籍「新訂　新しい道徳１」）

導入では、１学期に行った同じ内容項目での授業アンケートや振り返り結果をICTを用いて提示し、本時のねらいとする道徳的価値に対する生徒の関心を高める工夫がなされた。また、終末にも同じような発問を投げかけることで生徒は考えを深めていた。

部会協議では、ICT活用について、様々な工夫がなされていたと肯定的な意見が多く出された。また、「考え、議論する道徳」に向けて、出てきた意見を生徒同士で広げ、伝統工芸士の思いを深化させる必要があるなどの意見があり、発問の吟味等について話し合われた。

上野健一指導主事（東部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・ICTを用いて生徒の意図的指名につなげることや伝統工芸士の思いが伝わる構造的な板書が有効であった。ICTを活用する際はキーワードのみを書くなどの工夫も考えられる。

・内容項目Ｃ「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」で、教材の内容について考えることを通して、生徒が「自分も地域の一員である」という自覚をもって、自分たちの地域の伝統と文化についても考えられるようにすることが大切である。

・「考え、議論する道徳」の授業の実現に向けて、生徒が問題意識をもち、広い視野で多面的・多角的に考えること、自分との関わりで考え、人間としての生き方についての考えを深めることを意識し、一人一人の生徒の道徳性を養う授業づくりを目指していきたい。

〈第２学年〉　講神　敬志　教諭

主題　誇りを胸に

（内容項目　Ｃ　よりよい学校生活、集団生活の充実）

教材　「四十七年に感謝をこめて」

（出典：東京書籍「新訂　新しい道徳２」）

学校の老朽化に伴う「広廊下」との別れと「のりまきイベント」を通して、学校文化だけではなく様々な物への愛着について考える授業であった。意見を個人で考え、ペアで話し合ったり、学級全体で共有したりすることで、多面的・多角的に考える生徒の姿が見られた。

部会協議では、「生徒の発言に対する教師の問い返しによって考えが深まった」「授業の後半は、教材を離れて自校に対する思いを表現する時間を設定すればよかった」という意見や、授業を通じての生徒の変容を振り返る時間の取り方に関する意見が出された。

大茂孝二郎指導主事（東部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・扱い方が難しい教材への挑戦だった。ペア活動では、最後の一組になっても自分の考えをしっかりと伝える姿に、授業の基盤となる普段の温かい学級経営が表れていた。

・「自分のこととして考える」ための問い返しに対して、ペアで関わり合いながら、もう一度ワークシートに記入していく展開にしたことで、考えを更に深めることができた。

・校舎を「物」だと考える発言が続く中で、校舎を「仲間」だと考える発言が聞かれた。ねらいとする道徳的価値に迫る発言を教師が見取り、立ち止まって、学級全体で考えていくことが大切である。

大谷　嘉明（黒・明峰中）
岩田　寿浩（下・朝日中）
木下　　陸（中・雄山中）

〔研究主題〕主として集団や社会との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。－「考え、議論する道徳」に向けた発問の工夫－

西 部 地 区　　高岡市立志貴野中学校

西部地区大会では、高岡市立志貴野中学校を会場に授業提案が行われた。

〈第１学年〉　舟崎　美郷　教諭

主題　義務について考えよう

（内容項目　Ｃ　遵法精神、公徳心）

教材　「選手に選ばれて」

（出典：東京書籍「新訂　新しい道徳１」）

集団の一員としての思いと個人の思いがぶつかったとき、何を大切にしたらよいかについて考える授業であった。どの発問に対しても活発に話合い活動が行われた。中心発問により、更に自分事として捉えたことにより、考えをより深めることができた。

部会協議では、話合いや学習形態の工夫について話し合われた。

小川真紀子指導主事（西部教育事務所）から、道徳的価値に迫る発問の工夫や生徒の実態把握の大切さについて助言をいただいた。

〈第２学年〉　豊本　奈穂　教諭

主題　よりよい社会のために

（内容項目　Ｃ　遵法精神、公徳心）

教材　「宝塚方面行き－西宮北口駅」

（出典：東京書籍「新訂　新しい道徳２」）

よい行為ではないと分かっていても、自己判断で行動してしまう主人公の心情を追いながら、「私」を大切にする心と「公」を大切にする心の関係について考える授業であった。適宜、教師が効果的な問い返しを行うことで、よりよい社会について生徒の考えを深めることができた。

部会協議では、ねらいに迫るための導入の工夫について話合いが行われた。

山越励子指導主事（西部教育事務所）から、道

徳的価値への方向付けや発問構成の工夫、振り返りの在り方について助言をいただいた。

〈第３学年〉　田坂　順子　教諭

主題　将来の自分を見つめて

（内容項目　Ｃ　勤労）

教材　「好きな仕事か安定かなやんでいる」

（出典：東京書籍「新訂　新しい道徳３」）

就職活動を控えた大学生の新聞への投書から、将来の生き方についての考えを深める授業であった。「好きな職業」と「安定した職業」のどちらを大切にするか、２色のカードで自分の立場を明らかにすることで、話合いや教師との対話が活発に行われた。

部会協議では、ICTの効果的な活用や授業の終末の工夫について話し合われた。

三國大輔指導主事（西部教育事務所）からは、一人一人の意見を尊重する授業展開や振り返りの在り方、特別活動等との関連について助言をいただいた。

北村　陽一（高・戸出中）
中村　圭吾（砺・般若中）
中橋　洋哉（南・福光中）

第68回 研究大会報告

第68回東部地区大会

岐阜大学大学院の柳沼良太教授に「『考え議論する道徳科授業の創造』～考え議論する道徳に向けた発問の工夫～」と題してご講演いただいた。

１「読む道徳」から「考え議論する道徳」へ転換

道徳的価値を教え込む指導法ではなく、道徳的問題を解決する資質・能力を育成する指導法へと質的転換を図る必要がある。問題解決的な学習を積極的に導入し、「主体的・対話的で深い学び」に基づく「考え議論する道徳」を実現させたい。

２　道徳科における主体的な学び

生徒が道徳的問題を自分事として捉え、自ら目標を立て、責任をもって判断し行動することが、「主体的な学び」に繋がる。また、生徒が道徳的価値との関わりで自己を見つめ、人間としての生き方について考えを深めることが大切である。問題の原因は、心の外側ではなく内側にあり、その心の内側を見つめ、外側の現実問題と繋いで考えて解決に導くことが重要である。

３　道徳科における対話的な学び

道徳的諸価値の葛藤や衝突が生じる場面で、生徒が自分と異なる意見と向き合い議論し、自分の考えを発展させることが、「対話的な学び」となる。互いの見方・考え方を尊重し理解し合ったり、互いに納得できる最善解を熟議したりすることが、自他の考えをさらに磨き合うことに繋がる。

４　道徳科における深い学び

道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、人間としての生き方について考え議論することが、「深い学び」となる。そこでまず大事なのは、様々な場面や状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握する「問題発見学習」である。次に、適切な行為を主体的に考え、責任をもって選択し実行しようとする「問題解決学習」が大事になる。こうした道徳的問題を発見し、責任をもって道徳的価値の実現に向けて解決することが、深い学びになる。

５　考え議論する道徳の授業

生徒が道徳的問題に関心をもち、主体的に（個別最適に）解決を考え判断するとともに、対話的（協働的）に納得解を創り上げることが大切になる。また、道徳科の教科書は、自分の生き方と関連した切実な問題を当事者（自分事）として考える手段とすべきである。

６　道徳科の評価

生徒の学習状況の様子から、道徳性がいかに成長したかを積極的に認め励ます個人内評価を行うことが求められる。生徒が問題状況に向き合い多面的・多角的に考え議論できているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか、という二つの視点をもつことで、道徳科の指導と評価の一体化を図ることができる。

また、生徒が考え議論した記録をスタディ・ログとして残すことも有意義である。どのように考えを深めたかについてパフォーマンス評価したり、学期や学年を通して生徒の道徳性がいかに成長したかをポートフォリオ評価したりする。道徳科では、生徒の深い学びを総合的かつ俯瞰的に評価することを心掛けたい。

（滑・滑川中　綿屋実早樹）

第68回西部地区大会

京都産業大学の柴原弘志教授に「『特別の教科道徳』における深い学びに向けて～指導と評価の一体化を意識した指導体制の充実と道徳科の授業改善～」と題してご講演いただいた。

１「評価の視点」とフィードバック

道徳科の学習指導では、その授業のねらいに含まれる道徳的価値に関わる学習を通して、人間としての自己の生き方についてより深く考えられるようにすることが肝要である。他者との協働的な学びの前提には、「自分が自分に自分を問う」という「自己内対話」が大切にされなければならない。そのためにも、生徒一人一人の感じ方や気付き、考えを尊重し受容しつつ、大いに交流させて生かしていくことを心掛けたい。

道徳科では、学習指導過程や指導方法等に関する「評価の観点」と、生徒の学習状況等に関する「評価の視点」が示されており、到達度評価ではなく個人内評価による、認め、励まし、勇気付ける評価が求められている。

「評価の視点」では、生徒が道徳的価値や関連する諸事象について、他者の考え方や議論に触れ自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった視点から、七つの学びの姿が例示されている。

そうした具体的な学びの姿を見取ることができたとき、具体的な評価語によるフィードバックを心掛けることによって、生徒たちは、道徳科において求められている学び方を徐々に身に付けていくことになる。加えて、教師も道徳科における質の高い学習指導となる授業づくりへの確かな方法知を血肉化させていけるのではないだろうか。

２　道徳科の目標と小中のつながり

道徳科の目標は、道徳性を育むことである。道徳性とは、道徳的行為を可能にする人格的特性であり、道徳的諸価値がその人の内面において統合されたものともいえる。これまでの人生の中で育まれた道徳的諸価値が、行動への納得解として構造化され、行動原理となっているものとでもいえよう。

授業を行うまでのそれぞれの生徒における道徳的価値理解を基に、さらに協働的な学びを通して、価値理解や自己理解、他者理解、人間理解等を深めていくためには、小学校段階での学びを理解しておくことも必要である。

３　道徳科における発問の工夫

道徳科の授業では、問いに対する生徒の反応を、「聴く」という姿勢で、その表情等を観察することも重要である。

その際、生徒が本音を出せるような問いの工夫に加えて、問い返し・ゆさぶり等も重要となる。生徒の多様な考え等を受容しつつ、生徒の反応を十分に傾聴することで、生徒の発言の裏にある本音を顕在化させることもでき、道徳性の一端に触れることも可能となる。道徳科の本質に迫るためにも、重層的発問等の工夫も大切にしたい。

（氷・北部中　石川　智大）